

富田茂之

公明党 衆議院議員



とみた・しげゆき 1981年一橋大学法学部卒。93年に衆院選旧千葉4区で出馬し初当選。法務大臣政務官、法務副大臣、財務副大臣を歴任。現在は3度目の衆院経済産業委員会の委員長を務める。当選8回。

1953年に日本でも有数の港町・千葉県銚子市で生を受け、高校進学を機に上京。一橋大学法学部に入學し、法曹の道を志した。司法試験合格後には千葉県内に事務所を開き、弁護士生活をスタートさせる。行政事件民事、刑事問わず、難題を背負った人たちのために粉骨砕身したが、弁護士の本懐の中だけでは、本当に困っている人の役に立ち切れない場面に幾度も直面したという。

そんな折、公明党の講演会で、法律扶助の拡充の重要性を訴えたところ、党幹部の目にとまり、衆議院選挙への出馬を打診される。「立法という形なら人の役に立てるのではないか」との思いと、父が公明党の銚子市議会議員として真摯に活動していた姿を思い出し、政治家になることを決意。93年の衆院選旧千葉4区から出馬し、初当選を果たす。

これまでに法務大臣政務官、法務副大臣、財務副大臣を歴任。衆議院議員8期目に入った現在、党の中央幹事や千葉県本部代表、衆院では経済産業委員長を務めている。

これまでは児童虐待防止法、子ども手当や奨学金制度拡充など、特に文教政策に尽力。かつてアルバイトや奨学金をもらいながら大学に通っていた経験もあり、給付型の奨学金制度の創設に力を入れ、実現にこぎつけた。野党時代、学生やその家族から家庭の経済

苦学の末に弁護士となったが、多くの人の役に立つべく、舞台を法廷から議会へ変えた。文教政策からエネルギー政策まで、現場を知ることによって国の制度を変えていくと訴える。

上の都合で私学に通えないという声が公明党に多数寄せられており、教育問題に知見のある富田氏は自民党の関係経験者らに奨学金などのレクチャーを行っていた。こうした活動を継続し、両党の関係が密になっていったことが、「その後の自公連立政権への布石となった」という。

自費でエネルギー設備の視察 地熱、洋上風力に大きな期待

文教政策のみではなく、エネルギー政策への見識も深い。自民党の二階俊博議員や国民民主党の増子輝彦議員と、超党派の地熱発電普及推進議員連盟を2011年に結成。国内外の地熱発電所を積極的に視察するなど、再生可能エネルギーの普及促進を目指す。

世界でもトップクラスの地熱資源を持つ日本。しかし、地熱資源の多くは国立公園内に賦存しており、開発を行うにも自然公園法の関係で発電施設の建設を行うことができません。国立公園外から斜めに坑道を掘って熱源を得るという非効率な発電方法をとらざるを得なかった。民主党政権時代、地熱議連は

アイスランドの地熱発電の調査を行い、世界の主流である熱源の真上から坑道を掘れるよう、自然公園法を管轄する環境省に地熱開発に関する申し入れを行うと、認められた。「現場を知ること、国を変えられることもある。地熱議連の活動であらためて思い知った」

毎年、ライフワークの一つとして増子議員と自費で海外のエネルギー施設の視察を行う。過去にはフィンランドの「オンカロ」やスウェーデンの「エスポ」、フランスの「ビューール」・ドイツの「ゴアレーベン」など、各国の高レベル放射性廃棄物処理実験施設を見学し、国や事業者の原子力事業に対する姿勢、地域住民の考えなどを学んだ。帰国後には超党派の放射性廃棄物の最終処分に関する議論も結成。原子力発電環境整備機構（NUMO）に広報活動を活発化するよう働きかけた。

「トイレのないマンション」と批判されるように、バックエンド問題解決が原子力の妥当性に及ぼす影響は大きい。国民に理解してもらえよう、政治が前面に出て取り組むことが重要だ」と、国民的な議論が必要と説く。昨年訪れたオランダでは、洋上風力発電を

見て回った。同国は欧州内でも洋上風力の後進国だったというが、13年に国、州政府、自治体、事業者が再エネ推進を目指す「エネルギー合意」を果たすと、洋上風力の活用が一気に進展。オランダが欧州内で洋上風力のトップランナーになったという話を聞き、日本でも洋上風力の開発を促すべく、「再エネ海域利用法」制定を後押しした。

発電に適した強風が安定して吹いているため、事業候補地に地元・銚子市も選ばれた。幼少期には栄えていたものの、現在は6万人を割るなど過疎化が急速に進む。「漁業組合も洋上風力に協力している。これを実現して、少しでも故郷の発展に貢献したい」。地方に雇用を呼び込むこの再エネに関心を寄せる。

座右の銘は「克己」。苦学生だった経験もあり、強く刻んでいる言葉だという。さらに、議員会館の事務室には台湾の書家に貰ったという大きな書画が飾られていた。「鳶飛魚躍」とあり、鳶が飛び、魚が躍るなど生物が自由に生きているという意味だが、転じて、よい政治が行われ、平和な世の中だという意味もあるという。政権の一翼を担っている責任に対する、自戒の言葉でもあるのだろうか。

さまざまな現場に赴いて貪欲に勉強する熱心さと同時に、弱者を守り、地方の創生を図る温和な人柄も感じられた。

「現場を知ると、変わることもある」